

神戸神話・神話学研究会、植朗子、清川祥恵、南郷晃子編

『なぜ少年は聖剣を手にし、死神は歌い踊るのか：  
ポップカルチャーと神話を読み解く 17 の方法』

文学通信、2024

久保 華誉

KUBO Kayo

## I 活動内容

『なぜ炭治郎は鬼の死を悼むのか—昔話から読み解く『鬼滅の刃』の謎』（草思社、2023年）、『日本における外国昔話の受容と変容—和製グリムの世界』（三弥井書店、2009年）

## II 書評：神々との対話

神話には、忘れられない体験がある。筆者は口承文芸の、中でも昔話の研究者なのだが、あるとき授業で、ソロモン諸島に伝わる脱皮の神話を大学2年生に話した。こんな話だ。かつて、人は蛇のように脱皮して若返ることが出来たという。ある老婆が、孫が寝ているうちにそろそろ脱皮をしようと、川に出かけて脱皮し、若返って家に戻った。しかし、孫に自分と分かってもらえず、孫は泣き続ける。脱いだ皮を着ると二度と若返ることが出来ない。それで、仕方なく皮をもう一度着たという。それ以来、人間は老いて死ぬことになった……。と、話し終わった途端、学生が「先生！それって本当の話ですか？」と質問したのだ。ふざけているわけではないのは、目を見れば分かる。質問を少し笑う子もいたが、それくらい引き込まれて聞いてくれたことに驚いた。もちろん昔話はどれほど語ったとしても、昔々のあるところであって、本当のことと思う者はいない。その時、静かに神話の持つ力に感動したことを覚えている。

そんな現代にも通じる力強い神話を、神戸大学の研究プロジェクトから発足した神戸神話・神話学研究会が中心となり編んだのが本書である。J-Pop から始まり、漫画やアニメ、ゲーム、映画、舞台などのポップカルチャーに現れ、語られる神話。論稿12本、コラム5本、合わせて以下、17本のタイトルからなる。

米津玄師「死神」考（南郷晃子）、死神たちは言葉を振るう——『BLEACH』と古代インドにおける言葉と詠唱（川村悠人）、トポスとしての別世界——「東方 Project」の世界観と想像力（渡勇輝）、『サマータイムレンダ』の蛭子神——異形神の孤独と悲しみ（木下資一）、「魔術師」として生きること（斎藤英喜）、『鬼滅の刃』炭治郎に継承される「聖剣」——日輪刀と刀鍛冶の物語（植朗子）、神話の原初的断片としての怪奇マンガ——ジャンル論的考察（横道誠）、美少女戦士セーラームーン——ブリコラージュと神話・宗教・スピリチュアリティ・科学技術（木村武史）、ローマ神話の「母と息子」——『コロレイナス』にみる蜷川幸雄の階段の利用法、「英雄神話」の語り直しとしての『葬送の

フリーレン』(三村尚央)、ジャズする神々、あるいは友人たち——『坂道のアポロン』における神話的イメージの重なり合い(上月翔太)、映画『君の名は。』に見出す「現代の神話」の可能性(鈴木裕輔)、「怪獣」の神話性——『ゴジラ』たちは何を表象するのか(庄子大亮)、ポップカルチャーから何を論じるのか(平藤喜久子)、保守×愛国×神話——「美しい国」のポップカルチャー(藤巻和宏)、国造りと(反)成長の物語——『進撃の巨人』とポスト冷戦の私たち(河野真太郎)、暴走する運命——英米近代における「ジャガーノート」表象(清川祥恵)

タイトルと執筆陣の専門も多岐に渡る意欲的なものということが分かる。読み手にとって未知の作品があったとしても、それぞれ論者により冒頭にどのようなジャンルから読み解くのかのガイドラインとも言える「アプローチ方法」と、分析する作品がどのようなものなのかが分かる「作品概要」が書かれ、研究者も一般読者も置いてけぼりにはさせない工夫がされている。

巻頭を飾る死神では、近世説話を丁寧に読み解くことによって、鎌を持って容赦なく連れ去る西洋の死神と、死へと誘う日本の死神の両方が歌いこまれていることが分かる。日本の世間話の事例でも、自殺しようと場所を探す男に、たまたま通りかかった人が、ここにいい枝ぶりのがあるじゃないかと行って、通りすがりの人の方が首をつってしまい、男は我に返るという話もある。まさにふと取り憑かれる、誘われるという言葉がぴったりである。こうした誘う死神から、落語から原作の名付け親を取り払い、辻褃合わせのようにとってつけたかのような「因縁」という語り変えに、実は深い意味が出るという考察は大変興味深い。

これらの幅広い17本から分かるのは、やはり人間は、物語る生き物なのだ、ということだ。どのようなメディアを通して、時代も国も超えて。そして、今を生きる我々も、古い時代から語りつがれる神々と対話をしようとする。もちろん、本書の中でも表層的にとらえる現代の語り変えに警鐘をならしてはいる。しかし、様々な作品を通して今も神の物語は語り継がれていることを確信する。

たとえば遠藤周作の『沈黙』でも、神は沈黙を貫いてはいない。ここは様々な議論が起きる場面でもあるが、イエスは踏み絵に苦悩する人間に「踏むがいい」と語りかけていないだろうか。神がともにいることに気付かないで神の声を聞かないのか、それとも、その神の文化や歴史的背景を踏まえて対話し、新たな文化の中で語り継ぐのか。学術的な域を超えて、そうしたことが改めて問われているように思う。